

元駐アゼルバイジャン日本国大使 廣瀬徹也

日本国とアゼルバイジャン共和国の友好関係増進に向けて

金閣寺、京都



日本・アゼルバイジャン外交関係樹立20周年に当たる今年、ギュルセル・イスマイルザデー大使はじめ在日アゼルバイジャン大使館のご努力で、IRS-Heritage（「遺産」）誌の日本語版が発刊されるはこびとなりましたことに心からお祝いを申し上げます。本誌が日本人のアゼルバイジャンへの理解を深め、すでに良好な両国関係の一層の強化に貢献するものと確信しております。その創刊号に、

寄稿できますことを誠に光栄に思います。

まず昨年3月の東日本大震災に際しアゼルバイジャン政府や皆様からよせられた温かい見舞いの言葉とご支援に対し深い感謝の意を表したいと思えます。

アゼルバイジャン共和国は、東はカスピ海、北はロシア、西はグルジア、トルコ、アルメニア、南東はイランに囲まれ、地政学的観点から非常に重要性を持つ南コーカサ

ス最大の国家です。世界に存在する11の気候帯のうち8つの気候帯に属しているといわれており、太陽の光が降り注ぐカスピ海の浜辺から雪を戴くコーカサス山脈の森林地帯に至るまで、その変化に富んだ美しい自然はわたしたちの心を捉えます。炭化水素資源をはじめとする天然資源に恵まれたこの国は、地球規模のエネルギー政策が策定される際に重要な役割を果たしています。

しかし、それにもまして私が指摘したいのは、アゼルバイジャンの豊かな歴史と文化そして人々のこころの温かさです。首都バクーの郊外には、地下から噴出する天然ガスの焰が絶えず燃え続ける土地があり、これがゾロアスター教（拝火教）の生まれる源泉になったのではないかとされています。アゼルバイジャンの人達は誇りを持って自国を「火の国」とよびます。中世には、日本にもつながる「シルクロード」の要綱として栄えました。町々は当時の見事な建築物に彩られていま



乙女の塔

す。外国人がふらりと田舎の村に立ち寄っても、ひとびとはチャイと東西の粋をあつめたアゼルバイジャン料理でもてなしてくれます。

ロシア帝国時代の19世紀の後半には石油の生産がはじまり、20世紀の初頭にはバクーは世界の石油生産のなかばを産出していました。ロシア革命後の1918年5月28日東洋で初といわれる多党制の議会をもつアゼルバイジャン民主共和国が樹立されましたが、1920年には幕を閉じてしまいます。

1991年にソビエト連邦が崩壊すると、新生アゼルバイジャン共和国として再び歩み始めたのです。独立後、アルメニアとのダグルク・カラバフ（ナゴルノ・カラバフ）紛争を主因として、内政は安定せず、経済はいちじるしく疲弊しましたが、1993年10月大統領に就任したヘイデル・アリエフは、94年5月ダグルク・カラバフ紛争を停戦に導いて、国内に安定をもたらし、また石油の開発に着手しました。ヘイデル・アリエフは2003年末逝去しましたが、アゼルバイジャンでは今も国父のように慕われています。

その後、石油の輸出が本格化し、天然ガスも2006年末から生産が開始されました。それが追い風となって、アゼルバイジャンは目覚ましい経済成長をとげ、GDPは政府発表によれば、2005年から2011年の6年間で4倍になり、今や一人当たりGDPは7000ドルにのぼっています。前大統領の令息イルハム・アリエフ現大統領



領の経済政策は石油以外の分野の開発にも焦点を当てており、近年では工業、観光、農業、情報技術、代替エネルギー資源、再生可能エネルギー資源等の分野で大きな成果をあげています。この国の経済的可能性は高いのです

日本政府は1991年12月28日にアゼルバイジャン共和国を国家として正式に承認し、1992年9月7日に同国と外交関係を開設しました。1995年以降日本の石油開発関連企業や商社など民間企業がバクーに進出し、そのうち数社はアゼリ・チラグ・ギュネシリ（ACG）海底油田、バクー・トビリシ・ジェイハン（BTC）石油パイプラインなどの地域的プロジェクトに参画しています。

1998年2月のヘイデル・アリエフ大統領の訪日を契機として、2000年1月にバクーに日本大使館が開設されました。私は初代の駐アゼルバイジャン大使として、日本政

府の政府開発援助（ODA）を使って、アゼルバイジャンのインフラ作りのお手伝いや人的・文化的交流に努めました。

その後2005年10月には在日アゼルバイジャン大使館が開設され、両国外務省の間で政策に関する協議が毎年行われています。「日本・アゼルバイジャン共同経済委員会」や「日本・アゼルバイジャン友好議員同盟」も毎年のように会合を持ち、このように様々なフォーラムで両国関係をめぐる諸々の課題と世界的に注目を集めている諸問題について話し合いが行われています。過去20年のうちに、両国は互恵的なパートナーシップを築き、多様な分野で友好協力関係を打ち立てました。今後も相互尊重と相互利益の精神に基づき、この関係は益々発展してゆくものと信じて疑いません。◆

